

「つないで くねくね (中学年)」

授業者 お茶の水女子大学附属小学校 堀井 武彦

1. 大会テーマおよび題材について

本題材は、任意に切り分けた黄ボール紙を割ピンでつなぎ、つながれた紙片で形成される形のよさや美しさ、動きの楽しさなどの造形的変容を楽しむ活動である。

まず、黄ボール紙を任意のくねくね曲線(有機的曲線)で切り分ける活動から始める。直線的な切り分け方だと着想の手がかりとなる見立ての幅が狭められると考えたからである。次に、グループ内で紙片の交換をする。これには、たとえ任意のくねくね曲線で切るという条件設定があっても、個人活動だけでは、無意識に意図的な分割に向かう懸念を払拭するという意図がある。更に、紙片に無作為に穴あけパンチで穴をあける過程を仕組んでいる。これも、紙片の組み合わせによる見立てが着想の始点となり、発想したイメージの再現に収斂するという想定に対する揺さぶりを意図している。つまり、3つの条件設定によって偶然性や多様性を担保するという、対話的で深い学びというスローガンのイメージとは逆説的な手立てということになる。

本大会テーマとの関連では、想定が困難な時代と向き合う身体性の基盤を育むことによって、偶然性と向き合うことを畏れない感性を養う仮説を立てた。しかし、児童からすれば、コンテンツ(題材)からコンピテンシー(資質・能力)へ重心をシフトするという大人の都合とは関係なく、材料や用具等との出会いをきっかけとして表現や鑑賞の活動を楽しみ、浸るという展開に戸惑いはないはずである。このことに図画工作科の見方・考え方を重ねるならば、段ボール紙片の組み合わせ方やつなぎ方等の更新、即ち一つ作り、つくり変え、つくる—という造形的思考法の柔軟性を発揮する姿が想起できる。安心して、自分なりに活動できる場、安心して自分が自分で居られる場では、自然に他者の表現をも受け入れ、そこに自然と対話的な深い学びが発生すると考えている。この認識を「これでいいんだ!」と断言する根拠としている。

2. 本題材のねらい

- 黄ボール紙片を割ピンでつなげる活動を通して、割ピンや穴開けパンチ、パスなどを適切に扱い、表したいことに合わせて表し方を工夫する。(知識・技能)
- 割ピンでつないだ黄ボール紙片全体の形や動き方の見方や感じ方を広げて、表しながら表したいことを見つける。(思考力・判断力・表現力等)
- 割ピンでつないで偶然に生まれる思いがけない形や動きのよさや面白さを楽しみ、進んで造形的な創造活動と向き合おうとする。(学びに向かう力・人間性等)

3. 本題材の指導過程（1時間扱）

準備 黄ボール紙（八つ切り・薄）、 割りピン、穴あけパンチ、ピグマックスセット、
サクラクレパス はさみ、セロテープ、画板（作業下敷き）、サクラポンドタッチ

学習活動	指導の内容と留意点
1 黄ボール紙を切り分け、割りピンでつないで、形の変化や動きを楽しむ活動の見通しを持つ。	①試作品を示し、穴あけパンチや割りピンの使い方を示範したり、機能を伝えたりする。
2 黄ボール紙（八つ切り）をはさみで任意のくねくね曲線で二つに切り分ける。	②はさみで、黄ボール紙をくねくね曲線で二分することを伝える。
3 どちらか一片をグループ（4人）内の友人と交換する。	・児童の要求に合わせて、ギザギザ線やカクカク線、あるいは、それらの組み合わせも認める。（以下同様）
4 手元にある2つの黄ボール紙をそれぞれ、くねくね曲線で二つに切り分け（全4つの紙片）その内1片を別の友人（2人）と交換し、手元には四つの紙片を確保する。	③渡す紙片に記名することを伝える。 （以下同様）
5 4つの紙片を更にクネクネ曲線で二分する。（合計8片）	④この時紙片が小さくなり過ぎないように、目安として3分の1以上の面積に切り分けることを伝える。
6 8片の周囲に、穴あけパンチを使って、約2～3cm間隔で穴をあける。	⑤8つの紙片の内3枚を3人の友人と交換する。
7 8片の組み合わせから見立てたり、割りピンで無意識につないだ形や動きから発想したりして主題を掴み、立体に表現する。	⑥約2～3cm間隔は、あくまでも、穴が接近しすぎて穴がつながることを避ける目安であることを伝える。
8 主題のイメージがよりよく伝えるために、パスで造形的要素をかき加えたり、着彩したりして、全体の感を整理する。	⑦紙片の組み合わせや動きの面白さに注目すること伝える。 ・穴は増やさず、紙片の形は変えない。 ・紙片の残りは全て部品として活用する（接着）ことを条件に紙片の変形を認める。（以上2点は原則）
9 表したかったことを名札カードにまとめて、友人と作品を紹介し合う。	⑧残り時間に応じた着彩を考えることを伝える。
	⑨互いの作品のよさの交流を促す。





